

若者たちへの伝言 2024



長野大学 学生サークル Peace Edu.
「信州上田学」2024 年度事業

は じ め に

「若者たちへの伝言」は、2022年の初版の刊行から三冊目となりました。この若者たちへの伝言を出版するきっかけとなったのは、2021年にNHKの番組「あちこちのすずさん」への参加要請でした。上田市内の高校生と大学生たち（若者たち）が、太平洋戦争の終戦間際に上田から出征した方から直接聴き取りをして、その感想を全国の若者たちと共有するというものでした。お話そのものは大変有意義なものでしたが、出征体験された方々からの聞き取りはもう時間的限界に近づいていることを改めて感じたのでした。

そこで、翌年の2022年からゼミの調査研究のメインテーマとして「若者たちへの伝言」を掲げ、聴き取り調査の視点を「戦時下の日常」へすえて、今を生きる若者たちが現在の自分の生活感覚と当時を経験された方々と比較することで具体的なイメージをもって戦争というものをとらえられるのではないかと考えました。そして、聴き取ったこと（若者たちへの伝言）に対してお答え（返信）する対話形式を編集の方針としました。2022年版は、第一部が聴き取りの記録であり、投稿いただいた方々も含めて19名の方を収録できました。第二部は上田市内に残る戦争遺跡についての調査の記録をまとめました。2023年版は、「疎開」をメインテーマにすえて学童疎開の中でも縁故疎開をした方々からの聴き取りの内容を中心にまとめました。そして、今年度はゼミから学生サークルPeace Eduの活動に引き継ぎ、別所温泉への「集団疎開」に焦点をあてて調査を行うことにしました。

上田市誌によれば、「東京から長野県へ集団疎開した子供は約37,000人といわれ、そのうち上田・小県へ4,197人の学童がきました。上田市では別所温泉がもっとも多く1,351人で、3年生から6年生までの子供が約1年間にわたって慣れない集団生活を送った」のです。幼い子供たちが親元から離れての生活を余儀なくされた当時の疎開生活の日常の記憶を掘り起こし、次の世代に語り継ぐことが平和の尊さを考える上で大切であると考えました。

調査にあたって、別所常楽寺の伊野純子様にご協力いただき、当時のようすを知る地元在住の若林悦郎様や立教女学院の子供たちを受け入れた別所温泉「つるや旅館」の現女将の山極郁子様をご紹介します。さらには、山極様を通じて東京杉並区の立教女学院資料室の中村裕樹様にもつなげていただくことができました。また、第二部では、「無言館」館長の窪島誠一郎様に独占取材をさせていただくことができました。多くの皆様のご支援、ご協力を賜うことができました。

心より御礼申し上げます。

長野大学 副学長 山浦 和彦

目 次

はじめに	01
目 次	02
第1部 太平洋戦時下の疎開	03
1 集団疎開と縁故疎開	04
2 なぜ、別所温泉村への集団疎開が行われたのか	06
3 先生と児童の関わり	07
4 別所温泉つるや旅館との交流 つる屋旅館の女将 山極郁子さんとの出会い	08
戦後も続いた疎開地との交流	10
5 立教女学院のつるや旅館への集団疎開と、キリスト教系学校の苦悩	13
6 疎開学童との交流の記憶（若林悦郎さん）	17
7 今年度の活動紹介	20
第2部 特集	22
信州上田「無言館」館長 窪島誠一郎さんに聞く	23
第3部 活動を振り返って	27
自分にできることを続けて（4年 栗林 果穂）	28
戦後 80 年がたつ今だからこそ（3年 赤池 来菜）	29
語り継ぐ活動を振り返って（3年 小川 真央）	30
今の私にできることとは（3年 油井 凱心）	31
編集後記	32

第1部

太平洋戦時下の疎開



1 集団疎開と縁故疎開

1944 年(昭和 19)7 月サイパン島が陥落^{かんらく}。これによって日本本土への空襲が激しくなりました。

「今後、本土は連日の空を覚悟^{かくご}せざるをなるまい。と、国内のどの人の顔を見ても、いよいよ来るべき決戦の時が来た。もはや銃後^{じゅうご}いうべき地は、日本のどこにもあり得ないという緊迫^{きんぱく}した空気がみなぎり、戦局の不安に、ひそひそ話も交わされる重苦しい情勢となって来ていた。」

(『戦時下の立教女学院』より)

1944 年 6 月 30 日、日本政府は学童集団疎開を決意し学童疎開促進要綱^{がくどう そかいそくしんようこう}を発表しました。7 月 22 日、帝都学童疎開実施要領^{ていと がくどう そかいじっし ようりょう}¹⁾・帝都学童疎開実施細目^{ていと がくどう そかいじっし さいもく}が出されました。これによって、全国の小学 3 年生～6 年生の 100 万人以上を対象として学童疎開が進められました。疎開には、学校単位の「集団疎開」と親類を頼る「縁故疎開」とがあり、合計 70 万人ほどの児童が地方へと避難しました。集団疎開した子どもたちは、学校ごとに温泉旅館やお寺の本堂で集団生活を送りました。

疎開先の候補となる地域は首都圏から比較的近く、安全な地域が選ばれました。長野県は四方を山に囲まれているため空襲などの危険が少ないと考えられ、多くの疎開児童が身を寄せました。実際、東京からの疎開者数が最も多いのは長野(3.7 万人)であり、次点が福島、群馬、静岡(2.7～2.8 万人)です。

疎開の目的として「国策として行われたこの疎開は、戦争のために次世代の兵士を温存するという目的があったとされる。」と指摘されています。(『昭和 19 年学童集団疎開記録』p80 抜粋) 集団疎開には食費(1 人当たり当時 10 円、月収の 15～20%程度)と布団など日用品の負担が求められました。これらの費用が用意できなかったり、両親が疎開に反対したりして疎開を行わない児童も 33 万人程いました。また、病気などを理由に疎開に適さないと判断された児童も一定数いたとされています。大都市での空襲が激しくなると国は強制的といっても良いほどに都内の子どもを疎開させました。

先程出てきた集団疎開以外にも、親戚の人を頼って田舎に行く、縁故疎開と呼ばれるものもあります。

疎開先として選ばれる地域は主に、戦闘や攻撃から比較的安全な地域です。これには、田舎や

1) 帝都学童集団疎開実施要領：疎開の具体的方法

農村地域、山間部や海岸部などが多く含まれます。疎開先には子どもたちだけで行く場合や家族全員で疎開する場合など、人によって疎開の方法や手段はそれぞれです。戦争の終結や都市の復興などの条件が整った後に元の地域に戻ることもあれば、そのまま疎開先の地域で暮らす場合もあります。疎開は、戦時下において人々の生活を維持し、被害を最小限に抑えるための対策として必要不可欠なものだったのです。

しかしながら、疎開先の暮らしは決して豊かなものであるとは言えません。親元を離れて暮らさなければならない子どもたちや、疎開先の地域や学校に馴染むことができず、いじめられてしまう子どもたちなど、疎開先の暮らしは戦禍からは逃れることができたかもしれませんが、人間関係などに悩まされることもありました。

食事や衣服、住む場所、すべてにおいて自由はほとんどなく、苦しい生活を強いられていたのが現実でした。

「集団疎開」「縁故疎開」名前は違いますが、どちらもとても苦しくつらい生活を強いられていたことに変わりありません。ここでは戦争に出てはいなくとも生活や安全を奪われた人々について少しでも考え、戦争はどのような被害をもたらし、なぜ戦争は二度と起こしてはならないかを考えてみてほしいと思います。

〈参考文献〉

『戦時下の立教女学院』

『上田市誌 近現代編（7）』②⑩上田市民のくらしと戦争

（文責3年 油井 凱心）

2 なぜ、別所温泉村への 集団疎開が行われたのか。

ここでは、別所温泉村へ集団疎開が行われた背景や疎開児童を受け入れたときの様子について述べていきます。東京から長野に集団疎開した子どもは 37,000 人といわれています。長野県が多くの疎開児童を受け入れることになった理由は、周囲を山に囲まれており、安全性が高かったからです。軍需工場が少なく、空襲で狙われにくかったからともいわれています。

また、上田市においては別所温泉への疎開人数がもっとも多かったそうです。別所は旅館が多く立ち並ぶ温泉地なので、人を多く収容する力がありました。しかし、杉並区の杉並第五国民学校、若杉国民学校、桃井第二国民学校、西田国民学校、立教女学院初等学校の 5 校が疎開していたので、1,351 人が約 1 年間にわたってすし詰めの状態で集団生活を送っていました。

集団疎開の指示が出てから、受け入れを始めるまでの期間は、わずか 2 ヶ月でした。これは他に例を見ない早さだったので、短い期間に多くの準備を進めなければなりませんでした。この疎開に関しては、関係者が協力して速やかに準備を行ったため、受け入れがスムーズに進んだようです。受け入れる側も、子どもたちを送り出す学校や父母たちも、懸命の努力をされたことが分かります。

しかし、問題もありました。それは、収容力のある温泉地では食糧の生産が少なく、食糧供給ができないことでした。疎開した子どもには、国が食糧を配給していましたが、その基本量は非常に少なかったのです。それにも関わらず、昭和 20 年になると 1 年の間に 2 回も配給量が減り、食事を作っていた人にとっては大変なことでした。次の表は、疎開した児童たちが食べていた食事の一覧表です。

○献立表

疎開学園食事一覧表 別所にて（『戦時下の立教女学院』 p110 から一部抜粋）

月 / 日	朝	昼	おやつ	晩
9 月 8 日	味噌汁（冬瓜） 香の物（大根）	塩もみ（キャベツ） トマト	リンゴ	カレー（肉なし） きやらぶき
9 日	味噌汁（茄子） 香の物（菜葉）	清汁（菜葉、冬瓜）		くず煮（茄子、南瓜） 味噌汁（茄子） 香の物（菜葉）
10 日	味噌汁（菜葉） 香の物（茄子）	味噌汁（葱、茄子）		煮込みうどん（葱）
11 日	味噌汁（わかめ）	おひたし（大根葉） 香の物（茄子）		煮物（茄子、大根等） 味噌汁（茄子）
12 日	味噌汁（南瓜） 香の物（茄子）	塩もみ（茄子、キャベツ） トマト	梨	味噌汁（大根葉） 香の物（菜葉） かみなり（南瓜のくず煮）
13 日	味噌汁（大根葉） 香の物（茄子） しその葉塩漬	清汁（茄子） 佃煮（しその実）		カレー（肉なし）
14 日	味噌汁（茄子） 香の物（茄子）	煮物（茄子、大根葉）	ビスケット （婦人会より）	煮物（南瓜） 味噌汁（大根葉）

（文責 3 年 小川 真央）

3 先生と児童たちの関わり

立教女学院の紀要によると、学童集団疎開をしていたときの小学生たちのようすが詳しく書かれています。

持ち物や当時の時間割、普段の食事なども載っています。他にも、子どもたちと一緒に疎開した先生が書いた日誌も載っており、別所へ来た子どもたちの様子が『別所の生活 228 日』（昭和 19 年 8 月 25 日～昭和 20 年 4 月 9 日）として記されています。一部を紹介します。

8 月 29 日

「6 年の女児、不言室に集まり泣き出す。他の子は音楽会が始まったと言ってはゐるが、やはりどこか淋しさう。いいかげんな慰め言葉よりも思つて、その部屋へ行き、思い切り叱りとばす。“お前たちがワァワァ言つて泣いてゐるのを楽しさうに見てゐる敵国の子等の顔を思ひ浮かべろ！ そんな意気地なしでこれからどうするか！ ”、とせい一杯の声で。ところが思ったよりもすなほに泣きやんでくれたのには、かへつてこっちが涙ぐんでしまった。今、児童はすべて、郷愁の念を抑へ難き本能を、一生懸命理性の力で、気力で、克服しようと努力してゐるのだ。尊くも涙ぐましい努力であるが、これが彼等の第一の試練である。」

（立教女学院紀要，1975，No.4，p.97-98）

この文章からは、先生の迷いや後悔なども読み取ることができます。子どもたちを導くはずの先生も、当時の混沌とした状況ではどのように指導したらよいのか分からず、日々試行錯誤していたのではないのでしょうか。

（文責 3 年 小川 真央）

4 別所温泉つる屋旅館との交流



基本データ

- 山極郁子さん（70 歳）
- 聴き取り日／ 2024 年 6 月 22 日
- 現在の職業／別所温泉つるや旅館の女将

■つる屋旅館の女将山極郁子さんとの出会い

別所への学童集団疎開について調べるため、別所在住の山極郁子さんにお会いしてきました。郁子さんは、江戸の元禄創業である老舗旅館、「つるや旅館」の女将をされている方です。長きにわたり、温泉宿を営んできた山極さん一家は、疎開児童の受け入れ経験があるということで、詳しくお聴きするために旅館へお邪魔させていただきました。郁子さんご自身は戦後生まれですが、戦争経験のあるご家族から伝え聞いていることを基に、私たちにお話しくださいました。

昭和 19 年の 8 月 25 日に、東京都杉並区

から立教女学院初等科の児童が、つるや旅館へ集団疎開してきたそうです。つるや旅館の人たちは、立教の女子児童 55 名と教師、寮母が暮らすための部屋を提供し、温泉にも入れるようにしました。疎開生活を助けたつるや旅館に対して立教女学院はとても感謝していたようで、戦後も疎開児童らが同窓会を開き、旅館への訪問が行われていたとのこと。郁子さんのお話をお聴きする中で、疎開児童とつるや旅館の間には深い絆が結ばれているのだと感じました。また、立教女学院が再疎開をしていたことも、郁子さんからのヒアリングを通して分かりました。空襲が激し



つるや旅館の玄関にて



吉祥寺本堂



1994年（平成6年）8月 戦後50年建立 感謝の碑（つるや旅館敷地内）



最後に、郁子さんから別所での疎開の様子が記された2冊の本を貸していただき、他の詳しい資料が立教女学院の資料室にあることを教えてくださいました。そのことがきっかけで、後に立教女学院を訪れ、資料調査を実施することに繋がったのです。山極郁子さんとの出会いにより、別所温泉での疎開の実態について、より深く研究することができました。心より、御礼申し上げます。

（文責4年 栗林 果穂）

くなり、爆撃の被害を受けた軍関係の施設が次々と田舎に移ってきたため、疎開地がいっぱいになっていたようです。食糧不足も深刻であったため、別所に来ていた他の疎開校もそれぞれ、再疎開に対応することとなりました。立教女学院の再疎開地として選ばれたのは、南佐久郡青沼村にある吉祥寺^{きっしょうじ}というお寺で、昭和20年4月9日に再疎開をし、そのまま終戦を迎えたとのことでした。

■戦後も続いた疎開地との交流

東京から長野県へ疎開してきた子どもたちは、終戦によって故郷に帰った後、疎開地を訪れることはあったのでしょうか。ここでは、別所温泉つるや旅館及び南佐久郡青沼村（現佐久市臼田）の吉祥寺に疎開していた立教女学院の児童らが、疎開終了後、疎開地の皆さんとどのような関わりがあったのか。当時をどのように振り返っているのかについて、まとめていきたいと思います。

立教女学院全体における学童集団疎開は、440日間、つまり一年と少しの間行われました。別所温泉つるや旅館では、1944年の8月25日から翌年の4月9日までの228日間児童が暮らしたそうです。その後は、南佐久郡青沼村の吉祥寺へ移りました。終戦後、10年目、30年目、40年目、50年目の節目に、疎開児童らは同窓会を開き、お世話になった方々への感謝の気持ちと懐かしさで疎開地を訪ねていたようです。

【同窓会の期間】

- ・10年目の訪問（1954年8月23日～25日）
- ・30年目の訪問（1974年8月1日～2日）
- ・40年目の訪問（1984年8月24～25日）
- ・50年目の訪問（1995年8月25日～26日）

【つるや旅館への50年記念訪問の様子】

つるや旅館の山極尚一さんが、戦後50年の節目の記念訪問にされた立教女学院の皆さんをお迎えしました。尚一さんは、挨拶の中で「あのときは、両親も三郎おじも、寝泊りの場所を提供するだけで、食べるものとしては、旅館らしくもない茄子と胡瓜^{きゅうり}だけで、ひもじい思いをさせるばかりの日々に、かわいそうですまないとあやまる思いだと、よく私にくりかえし話していました。」と語られたようです。

しかし、立教女学院の元疎開児童らは、厳しい戦時下の中でつるや旅館の方々が、出来る限りの真心^{まごころ}を尽くしてくれていたと感じていたようです。こうした、疎開地の人々の温情^{おんじょう}

【50年目の記念訪問時のプログラム（1995年8月25日～26日）】

日付	内容	時間・場所
8月25日	・バスにて、つるや旅館着。 挨拶、記念撮影などを済ませる。	午後4時 つるや旅館前
	・感謝状贈呈・あいさつ（山極尚一様）	午後8時 ロビーにて
	・夕食（その後に入浴）	午後7時 広間にて
	・夜が更けるまで思い出を語る。	午後8時～ 談話室・各部屋にて
8月26日	・起床後、散策へ。 （北向観音、あたご池、薬師公園、葵の湯、共同炊事場あと）	
	・朝食	午前7時30分
	・バスでつるや旅館を出発。	
	・青沼吉祥寺に到着。	午前8時30分



吉祥寺にある石碑



吉祥寺山門（佐久市指定有形文化財）

があったからこそ、疎開生活乗り越えて今の自分があるのだと、同窓会参加者は尚一さんに熱い想いを伝えました。

【疎開地へ感謝の石碑を贈呈】

終戦後、50年目を記念して、立教女学院の元疎開児童の皆さんは、疎開でお世話になったつるや旅館と委託訓練^{いたく}でお世話になっ

た富士山村奈良尾や南佐久吉祥寺の三ヶ所に感謝の碑を贈っています。そこには、疎開生活でかけられた、温情に対する深い感謝の気持ちと、戦争の無い平和な世の中が続いてほしいという願いが刻まれています。

吉祥寺には、当時の疎開生活を過ごした木造の学び舎と感謝の石碑が山門をくぐるとひっそりと佇んでいます。



吉祥寺に残る学び舎

【記念誌から当時を振り返って】

30 周年記念誌から

～集団疎開から三十年 懐かしの地と人
とに逢えて～には、「1 年 3 か月の疎開期間は、
淋しさと空腹の辛さに耐えることの連続で
した。一中略― 子供ながらに、辛さから逃
れるため色々と知恵を働かせたこともありま
した。子ども同士のかげひきもありました。
自分の身を守るためのささやかな

嘘も時にはつかなくてはなりませんで
した。勿論、色々と楽しい思い出もたくさんあ
ります。その楽しい思い出も、すべてを堪え
なくてはならないあの厳しいワクの中でのこ
とに過ぎなかったのです。」

と当時の様子が述べられています。このこ
とからも、子どもたちにとって親元を離れ、
知らない土地で過ごす、疎開は、苦痛な日々
だったことがうかがえます。

また、同窓会の記念誌には、懐かしの地を
巡ることによって、思い出される当時の様子
が鮮明に書かれています。「人には、色々、
戦争にまつわる体験、思い出がありましょ
う。戦場で、或いは戦災で実際に死と向き合
った人。

又肉親の死などの体験。そして私たちのよ
うに、両親と離れ空腹と淋しさに泣いた学童
疎開。私にはすべてが同じ重みをもった体験
に思えるのです。それぞれが、それぞれの状
況の中で精一杯厳しさと戦っていたという意
味で、それらは全く同質のものだと思うので
す。」と述べられています。

私はこの記念誌を読み、戦争中は戦地以外
の色々な所でも、戦いが起こっていたのだと
分かりました。淋しさとの闘い、飢えとの闘い。



吉祥寺から通った旧青沼小学校の門柱

この見えない戦いを皆さんは知っていまし
たか？

〈参考文献〉

学童集団疎開十周年記念誌

―集団疎開から三十年―懐かしの地と人に逢
えて

学童集団疎開あれから五十年 感謝と平和の
思いいついつまでも

(文責 3 年 赤池 来菜)

5 立教女学院のつるや旅館への 集団疎開と、キリスト教系学校の苦悩

立教女学院は、学校教育を通じてキリスト教の福音¹⁾を伝えることを目的とし、明治10年に宣教師²⁾らによって創立された、女子教育の先駆けとなった学校の1つです。その成り立ちから、天皇を神として崇拝する戦時下の日本の風潮は、立教女学院にとって受け入れがたいものであったに違いないと思います。キリスト教に基づく教えを基本理念とする立教女学院にとって、軍国主義下の日本の思想は、本来ならば相反するものがあつたでしょう。

しかし、戦時下の日本において、国の命令に従わない組織は国から目を付けられ、反体制勢力として弾圧^{だんあつ}される恐れがありました。実際、国の政策に反抗を示した人々が非国民^{ひこくみん}として投獄^{とうごく}されていく中で、当時の立教女学院の先生たちは、生徒の命と学校の存続を護^{まも}るため、苦渋^{くじゆう}の決断で国に従う道^{みち}を辿^{たど}っていったのです。ここでは、そんな立教女学院の先生方の悲痛^{ひつゆう}な決意と、子どもたちを守るために踏み切った集団疎開^{しうかい}の全貌^{ぜんぼう}についてまとめていきたいと思います。

■別所温泉つるや旅館への疎開のはじまり

昭和19年の6月末に学童集団疎開の実施が閣議決定^{かくぎけつてい}されると、数週間後には東京都内の全国民学校の校長先生が集められ、東京都の疎開^{しうかい}を勧める方針が伝えられました。その際、立教女学院は杉並区の管轄^{かんかつ}に入り、他の国民学校と行動を共にするのか、独自に疎開に対応するのか、選択を迫られました。これは、立教女学院が私立の学校という立場であり、国民学校ではなかったためでした。

当時の校長先生である門馬^{もんま}先生は熟考^{じゅっこう}の末、杉並区の国民学校と一緒に疎開するという道を選びました。その後、共に疎開する杉並区の国民学校の校長先生たちと疎開先の別所村へ打ち合わせに行き、保護者への説明や児童の身体検査を済ませ、荷物の運び込み等を着々と進めていったのでした。こうして8月25日に西荻窪駅を出発する運びとなったのです。

第1回目の疎開に参加したのは、3年生から6年生までの児童55名と引率の教師4名に寮母2名の合計61名でした。彼らを乗せた疎开学童用列車が別所温泉駅に着くと、先に疎開していた杉並区の国民学校や別所村の児童、関係者のみなさんが一堂に集まり、温かく迎え入れてくれました。立教女学院の児童や先生方にとって、思いもかけないことでした。

別所村での歓迎を受けた立教女学院の児童たちは、こうして宿泊先のつるや旅館さんの門をくぐったのでした。つるや旅館さんの方々は、とても親切であり、子どもたちに愛情深く接してくれたため、親元を離れた幼い子供たちにとって、大きな支えとなったようです。

1) 福音とは、「良いたより」、「喜ばしいおとずれ」の意。イエスからのメッセージ。福音書に記されているキリストの生涯と教え。

2) イエス・キリストまたは教会から派遣されて福音を伝える人。キリスト教会が外国伝道のために派遣する職務者。



別所温泉の疎開児童たち（昭和 19 年） 出典：上田市立博物館所蔵

■戦時下における立教女学院の苦難の日々

上記で述べた通り、立教女学院の児童たちは別所温泉のつるや旅館さんへ集団疎開することができましたが、その後の疎開生活は決して楽なものではありませんでした。食べ物や衛生面の問題、幼い身の上で家族と離れ離れになった精神的ストレスなど、様々な問題があったようです。しかし、こうした実情は決して珍しいことではなく、立教に限らず他の疎開校・疎開地においても同様でした。

ここで注目すべきは、立教女学院は基督教の教えに基づいた教育を行う、ミッションスクールであったということです。他の国民学校とは異なる特性をもっていたからこそ、様々な壁にもぶつかっていました。ここからは、戦時下における立教女学院の、苦悩の日々を記していきたいと思います。

1つ目は、宮城遥拝^{きやうじやうようはい}についてです。宮城遥拝とは、皇居に向かって敬礼（遥拝）する行為です。皇居遥拝^{こうきやうようはい}とも言われ、天皇へ忠誠^{ちゆうせい}を誓わせる運動の1つとして、国民の戦意^{せんい}を高揚させる目的で盛んに行われました。ちなみに、遥拝は場所を問わずにいたる所で行われ、日本国外にいても実施されていたそうです。

この、宮城（皇居）に向かって最敬礼^{さいけいれい}を示す行為は、聖書の教えとは相反するものでしたが、戦時下では理由をつけて拒否を続けることも難しく、学園内でもやむを得ず取り入れるようになりました。しかし、全ての先生方がこの事実を受け入れたわけではなかったのです。

元立教女学院中学校主事であった三浦知子先生は、昭和 19 年 3 月に教員会議が宮城遥拝で開会されたことに抗議して辞職されました。以前は、キリスト教のお祈りから会議が始まっていましたが、国の情勢に応じて宮城遥拝へと変更されたことは、当時の立教女学院の先生方にとっては大変なショックであったと思われます。

2 つ目は、御真影^{ごしんえい}の下賜^かと奉安殿^{ほうあんでん}の設置^{せつち}についてです。御真影とは、天皇・皇后^{しやうぐうしやしん}の肖像写真であり、明治政府によって全国の小・中・高等学校に授与^{じゆよ}されていました。当時の日本では、御真影は天皇・皇后の身体であると考えられていたため、奉安殿（御真影を補完する建物）に教育勅語と共に安置されていました。もともと、御真影を配布される学校は、国が認める一定の資格がある学校のみとされていたため、立教女学院のようなキリスト教系学校は、配布の対象外でした。これは、立教女学院にとっては好都合であったわけでしたが、戦争が激しくなり、天皇の神格化^かが強く押し出される中で、キリスト教系の学校も御真影の下賜願いを出さざるを得なくなっていたのです。

1944 年（昭和 19 年）4 月 21 日に、ついに立教女学院も御真影の下賜願いを出し、東京都庁へ受け取りに行くことになりました。当日は、保護者の方にも呼びかけ、学校関係者らで盛大に迎え入れ、豪華^{ごうか}に作られた奉安殿まで運び込んだそうです。

この奉安殿は、当初は校内にありましたが、空襲が激しくなると安全な場所へ移す必要が出てきました。1944 年 8 月に学童集団疎開^{しうかい}が開始されますが、真っ先に疎開の対象となったのは、児童らではなく、この御真影であったようです。杉並区の学校では、比較的安全な奥多摩の山間地に急いで奉安殿を建設し、そこに御真影を移したとされています。先生方は、夜中も交代で御真影の見回りに行き、終戦の日まで命懸けの覚悟でこれを守り通したのでした。

3 つ目は、外国人教師の離職^{りしき}についてです。まだ、太平洋戦争が開始される前の頃、当時の立教女学院の副校長は、アメリカ人女性のヘイウッド先生が務めていました。ところが、日米の関係が悪化するにつれて、在日外国人への世間の風当たりは強くなり、先生はスパイを疑う軍の警察から厳しく監視されるようになったのです。どこに行くにも許可をもらわなければならない、手紙は全て検閲^{けんえつ}されていたようです。こうした状況を受け、自分がここに居ることで周囲の人に迷惑^{めいわく}がかかると考えた先生は、ついに日本を去る決意を固めました。

帰国に際し、ヘイウッド先生が生徒に手紙を宛てているので、一部抜粋して掲載させていただきます。

「この学校はアメリカにいる日本のお友達の心によって建てられたものであることをいつもお忘れにならないで下さい。今日、日米両国がどのように重苦しい不吉な間柄^{あいだがら}になるとしても、この皆さんの間から日本とアメリカの平和がもたらされてゆくものであるように、



朝の読書風景 立教女学院資料室より提供

そしてひいては、世界平和のくさびに皆さんが
なって下さるようお願いします。」

と記されていました。子どもたちへの教育に心
血を注いできたヘイウッド先生は、このような
形で学園を離れることになり、やり切れない気
持ちがあったと感じます。そうした辛い状況下
でも、この手紙の中には生徒を思いやる先生の
人柄が表れていて、先生自身がいかに、両国の
平和を願っていたのかが伝わってきました。

ここまで、戦時下における立教女学院ならで
はの問題について取り上げてきました。これら
の他にも、礼拝堂での祈りができなくなったり、学園が力を入れていた英語教育が禁止になつた
りと、様々な困難に直面していたようです。しかしながら、こうした事態は一見すると、国家の
非常時であったのだから仕方がないとして、あっさりと片づけられがちです。けれど、本当にそ
れでいいのでしょうか。

私は、立教女学院が抱えていた苦悩というものは、つまり、精神的自由が脅かされていたこと
であると考えます。思想・良心の自由、信教の自由、表現の自由、学問の自由、これらがはっき
りと目に映るものではないとしても、生き生きと人生を歩むためには欠かすことのできない、と
ても大切な権利です。

基本的人権が保障され、多くの自由を享受できる今だからこそ、現在の当たり前が当たり前で
はなかった過去を振り返ることには、大きな意義があるのではないのでしょうか。立教女学院が超
えてきた荒波の数々について知ることは、過去から学びより良い未来をつくることに繋がると感
じています。

〈参考文献〉

『戦時下の立教女学院』 2011年3月10日出版
(編集：立教女学院資料室委員会)



疎開学童たちの集合写真（つるや旅館前）
立教女学院の資料室に展示

(文責4年 栗林 果穂)

6 疎開学童との交流の記憶



基本データ

- 若林 悦郎さん（88 歳）
住所／上田市別所温泉在住
- 聴き取り日／2024 年 6 月 22 日
- 終戦当時／国民学校の 3 年生
- キーワード／集団疎開・縁故疎開・別所村

Q まずは、若林さんの子ども時代について教えてください。

私は、昭和 10 年（1935 年）に、長野県小県郡にあった別所村で生まれました。昭和 12 年に日中戦争が始まり、昭和 16 年には太平洋戦争が勃発したので、とても戦争色の強い少年時代を過ごしました。小学校は、別所小学校へ通っていましたが、現在は、統合されてなくなりましたが。

＜物資不足の生活＞

当時と今の大きな違いの 1 つとしては、圧倒的に物資が足りていなかったことです。食べ物から着るもの、勉強道具や日用品、全てが満足になかったので、色々と工夫しながら暮らしていました。学校へ行って勉強しようにも、ノートも消しゴムも持っていないんですよ。だから、新聞の余白の部分を切って糸で短冊のようにつるして、そこへ文字を書いていましたね。また、消しゴムの代わりとしては、自転車のチューブを切ったものを使っていました。あんまり綺麗には消えないんですが、それしかなかったの。他にも、鉛筆が贅沢に使えなかったの、短くなってきた

ら 2 つに割って割りばしに刺していました。そうすると、最後まで使いきれんです。食料も、食べ盛りの子どもたちにとっては十分ではありませんでした。だからこそ、食べ物はみんなで分けることにしていましたね。柿の皮干しや、サツマイモの芋干しをおやつに食べた時も、上級生はきちんと等分して、下級生に渡していました。それから、こんなこともしていましたよ。外に干してある小麦を手ですりつぶし、殻を息で吹き飛ばします。そして、残った粒を口に含んで、ガムのような食感を楽しんでいました。紫色になった、食べごろの桑の実も一緒に入れると、甘くて美味しかったんですよ。

Q 疎開児童との思い出はありますか？

別所へは、多くの疎開児童が来ていました。こっちに祖父母や叔父、叔母等の親戚の家があるということで、その縁を訪ねてきた縁故疎開の児童がいましたね。また、集団疎開と言って、都会の学校からまとまって、団体でやってきた人たちも大勢いましたよ。

《縁故疎開の児童との思い出》

縁故疎開の児童は、主に東京や横浜、名古屋などの、戦火が激しくなりやすい所から来ていました。彼らは別所小学校へ通っていたので、学校はもう満杯^{まんぱい}でしたね。机が足りなくて、2人用の机に無理やり3人で座って授業を受けていました。1年生から別所小学校へ入学し、そのまま6年生まで通っている子や、学年の途中で転入してきたりする子など、それぞれの事情に応じて疎開していたようです。ちなみに、あるクラスは、入学時の児童数が45名でしたが、卒業時には56名になっていた気がします。

縁故疎開の児童との思い出としては、地元の学童と色々な違いがあったことを覚えています。例えば、服装や髪型一つとっても、地元の児童が長ズボンに丸刈りというスタイルなのに対し、半ズボンで坊ちゃん刈りの子がいたりしました。もちろん全員がそうではないですが、裕福^{ゆうふく}な家の子どもはキャラメルや皮のグローブといった高価な品を持っていたりしましたね。また、見た目だけではなく、言葉遣いや立ち居振る舞^{たちいふるま}いも、洗練^{せんれん}されている印象を受けました。勉強面においても、物知り^{ものしり}で利発な様子の子が多く、授業中も良く発言をしていました。

《集団疎開の児童との思い出》

集団疎開の子どもたちは、それぞれの学校ごとで独自に生活を送っていたため、地元の子どもたちと交流する機会はあまりなかった気がします。集団疎開で来た学童は、勉強も主に宿舎である旅館で行っていたため、日常的に会って一緒に遊ぶということはありませんでした。恐らく、子どもたち同士のトラブルやいじめを防ぐため、あまり関わらせなかったのだと思います。



ですが、そんな中でも、別所の子と集団疎開の子が交わる数少ない機会がありました。それが、委託訓練^{いたくくんれん}です。月に1、2回程、村の各農家に集団疎開中の子どもたちが順番で向かい、1泊させてもらうんですよ。大抵、2～3人の班でお宅へ伺い、お世話になる家の人と一緒に食事を取ったり、簡単な畑仕事を行ったりしていました。私の家にも、小学校1、2年の子が泊まりに来たことがありましたよ。

この委託訓練ですが訓練とは名ばかりで、実際は幼い身で親元を離れた児童を気遣い、一時でも家庭の温かさを味わわせることを目的として行われていました。別所村の人々もそれを承知していて、各家庭が親切な心で子どもたちを迎え入れ、出来る限りのごちそうでもてなしたそうです。普段の窮屈^{きゅうくつ}な集団生活から解放された児童は、お腹いっぱいになるまでご飯を食べて、夜は温かい炬燵^{こたつ}で団らん^{だんらん}の時間を過ごしました。この委託訓練は、児童にとって何よりもの楽しみだったんでしょうね。実はもう1つ、地元の児童と集団疎開の児童が接点をもつ場がありました。それは、学校行事です。学芸会や運動会といったイベントの際には、いつもは旅館に居る彼らも、別所小学校へ来ていたんです。運動会では共に綱引対決^{つなひき}をしたのですが、体力では東京の子には負けないと、我々は張り切って

臨んだものでした。また、学芸会では、疎開学童の品のある仕草やせりふ回しに地元の子たちは引き込まれ、外から見ていた私たちは、さすが都会の子だなあとカルチャーショックを覚えました。

Q 子どもたちが疎開生活を送る中で、どんな所が大変そうでしたか？

1つ目は、衛生面ですね。当時は、しらみが問題となっていました。特に、集団疎開の子どもたちは共同生活を送っているので感染しやすく、その処理に困っていました。男の子は坊主にすれば良かったのですが、女の子はそうもいかないのです。

2つ目は、家族と会えない寂しさだと思います。縁故疎開の子どもならば、両親とは離れても親族と一緒に暮らせるのでまだ大丈夫ですが、集団疎開の子は本当に辛かったんじゃないでしょうか。小学校低学年であったし、1年2カ月もの間、見知らぬ土地で慣れない生活を送り、家族が恋しかったでしょうね。面会もあったみたいですが、全ての親が来れたわけではなかったので、子どもながらにかわいそうだという気持ちになりました。戦争は嫌なものだなと思いましたね。



私からの返信

若林さんからのヒアリングを通して、戦時下を生き抜いた当時の子どもたちのたくましさ、懸命さがひしひしと伝わってきました。それと同時に、大人が始めた戦争に理不尽に巻き込まれ、苦しい経験をした子どもたちが大勢いたということを再認識しました。

この先の未来において、過去と同じ悲しみや辛さを少年少女に経験させないよう、私たちが平和な社会を築いていかなければなりません。私は来年から社会人になりますが、これからも平和の輪を広げるために、自分にできることを探して活動していきたいです。

(文責4年 栗林 果穂)



7 今年度の活動紹介

◆ 5月 上田市内の戦争遺跡を訪ね、フィールドワークを行いました。

- 【行程】①上田市下之郷（東山松脂採取痕）
②仁古田飛行機製造地下工場跡
③上田飛行場 半地下工場建設跡
④上田飛行場跡（現上田千曲高校）
⑤戦災のケヤキ（現上田東高校内）
⑥奉安殿（本原小学校となり廣山寺内）



東山にて

◆ 6月 聴き取り調査①別所在住 若林悦郎さん 聴き取り調査②別所温泉「旅館つるや」女将 山極郁子さん



写真右：若林悦郎さん



写真左：山極郁子さん

◆ 7月 インタビュー：「残照館」館長の窪島誠一郎氏



写真右：窪島誠一郎さん

◆ 9月 立教女学院での学童疎開調査

立教女学院資料室のご協力により、
学童疎開に関する資料調査

写真は、立教女学院資料室にて
左側から、栗林果穂、小川真央、
立教女学院資料室 中村裕樹様・岡部祐子様
赤池来菜、油井凱心



◆ 11月 ①松本市立会田中学校で 「平和を考える特別授業」を 行いました。

これまでに聞き取った戦時下のお話しや戦跡
調査内容を中学生や地域の方、
約 90 人に向けて紹介しました。



◆ 11月 ②上田市戦没者追悼式にて、 平和メッセージを発表

上田市遺族会・市議・自治会関係者などの
100人余が参列するなか、Peace Edu. リーダー
の栗林 果穂さんがスピーチを行いました。



◆ 11月 ③坂城町講座にて、太平洋戦時下の 上田大学生が語り継ぐ活動を通して

坂城町文化センターにて、
大学生がこれまでに聴き取った戦時下の暮らしなど、
参加者に向けて語りました。



◆ 11月～1月 原稿執筆・活動まとめ

◆これまでの刊行物

2022 年度発行
『若者たちへの伝言』



2023 年度発行
『若者たちへの伝言 2023』



第2部

特集



信州上田「無言館」館長 窪島誠一郎さんに聞く



基本データ

- 窪島 誠一郎さん（83 歳）
職業／美術評論家・美術館館主
- 聴き取り日／2024 年 7 月 7 日
- キーワード／窪島さんの半生・絵画

2024 年の夏、上田市前山にある無言館を訪ね、館長である窪島誠一郎さんへの、インタビューのお願いに行きました。無言館の方が窪島さんへ取り次いでくださり、窪島さんから快くご返事をいただくことができました。お忙しい中、取材にご協力いただき、誠にありがとうございました。窪島さんをはじめ、関わってくださった関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

以下では、同じく窪島さんが館長を務める、KAITA EPITAPH 残照館（旧「信濃デッサン館」）にて行われた聞き取りの様子について、掲載させていただきます。

◇窪島さんの少年時代

私は、1941 年に東京都で生まれました。生後間もなく養子に出され、養父母に育てられたんです。子どもの頃から絵が好きだったので、画家になりたいと思っていました。しかし、家はとても貧しく、高校へ進学するのもやっとな状況だったので、高校生の時は渋谷の生地屋でバイトをしていましたね。

◇村山槐多との出会い

～村山槐多に魅せられて～

その生地屋の近くに本屋があったので、バイトがてら立ち寄っていたんですが、そこで 17 歳の時に、村山槐多の絵画集と出会いました。彼の絵を見た時、私はとても感動しました。「こんな人がいたのか。」と思うほどで、決して多くはなかった給料をはたいて、画集を購入したんです。そこから、村山のことを調べるようになりました。

村山槐多（むらやまかいた 1896-1919）は、横浜の生まれで、非常に優れた画家・詩人家です。上田にゆかりのある画家、山本鼎のいところでもあるんです。村山は、わずか 22 歳で夭折していますが、17～19 歳の時には上田を旅しており、多くの作品を残しています。従兄の山本鼎の家にひと月ほど滞在しながら、今の東御市の大屋、和などで風景画を描いたんです。これが、私が上田を知ったきっかけでもあります。

◇窪島さんの青年時代

窪島さんは、高校卒業後、色々な仕事を経験されたそうです。22 歳の時には、靴の修

理屋を営んでいたご家族のお店を改造し、東京の世田谷に居酒屋を開いたそうです。窪島さんは当時のことについて、以下のように振り返っています。

「昭和の時代は、なんでも OK の時代だったように思います。全員が我を忘れていた。高度成長期でしたし、東京オリンピックもありました。当時、一家3人暮らしで3畳1間でした。その家を改造してお店をつくりました。おりしも高度成長期と重なり、経済は右肩上がりでした。

東京の明大前で店を出していましたが、マラソンでエチオピアのアベベと日本の円谷選手が競って店の前の沿道を走ったんです。ものすごい人が応援に出ていました。それで、おにぎり弁当を作って売り出したんです。そうしたら、それが大当たりしてものすごく儲かったんです。夜は、居酒屋でしたから賑わいましたね。ジュークボックスなんてのもあってね。人気があったね。朝7時から夜中の2時、3時まで営業してました。昼間はコーヒー等のカフェ。夜はお酒を出しました。

当時は、『一戸建て』、『人並みの生活をしたい』これだけでしたね。先の大戦で300万人も亡くなったことなど、考えていませんでした。送られてくる電気の先に、原発の登場があることも、全く考えませんでした。』

◇東京から槐多のゆかりのあった上田へ ～夭折画家たちの美術館をつくりたい～

窪島さんは、20代の頃からお店で稼いだお金を使い、槐多を始めとする夭折画家たちの絵をこつこつと買い集めていました。槐多の足跡を辿って上田を何度か訪れてたことで、この地が気に入り、夭折の画家たちの美術館を創ろうと決心したそうです。33歳の時上田に引っ越してきた窪島さんは、美術館



槐多の画集の話聴く二人

を建てるにあたり、前山寺のふみさんという女性が力になってくれたと、当時の記憶を思い出しながら教えてくださいました。ふみさんが地元の人に協力を呼び掛けてくれたおかげで、多くの人に手伝ってもらい、今の残照館が完成したそうです。

◇野見山暁治さんとの出会い

～ふたつの命～

信州上田の前山に残照館を築いた窪島さんは、村山槐多を偲ぶ「槐多忌」を開催していたそうです。そこで、無言館建設のきっかけとなった、大きな出会いがあったとお話くださいました。

「14回目の槐多忌の時に画家の野見山暁治さんをお招きしたんですが、私が野見山さんに言ったんです。『なぜか、早世した画家にひかれるんですよ。生身の人間が亡くなっても、その人の絵もこの世からなくなるのは嫌だったんです。絵が残れば死んでいないんです。だから、画人には、ふたつの命があるんです。』

すると、野見山さんが『無名の画家ではダメなのか？』と。自分と一緒に出征した仲間しゅっせいで、戦死した画学生たちがいる。画家への志半ばでこの世を旅立った学生たちの作品を集めたらどうかと、提案されました。』

そうした経緯で、窪島さんは戦没画学生たちの絵を集めることになり、北は北海道、南は九州、種子島まで渡り歩き、ご遺族に彼らの作品を預かりたい頼んで回ったそうです。そうして集めた絵は、当初は残照館の入り口の部屋に保管していたそうですが、すると、不思議な事が起こったようです。

「絵から声が聞こえるんです。『もっと描きたかった。』『生きて絵をかきたい。』とね。この声が聞こえた時、私はは残照館とは別に、遺族から集めてきた彼らの絵を飾る美術館をつくりたいと思ったんです。そうすれば、彼らの声がコーラスのようになって、私たちの心に何かを伝えてくるはずだってね。」

◇無言館に寄せる思い

「無言館は、本来あってはならない美術館なんです。」これは、インタビューの中で、窪島さんがおっしゃられた言葉です。「地球上で起こっている、あらゆる紛争・戦争が早くなくなりますように。間違っても、2つ目3つ目の無言館が誕生しませんように。と、そこにいる彼らも祈っています。」と続けられました。



インタビューを終えて談笑する3人

また、窪島さんは無言館の今後についてもこんな風に考えられていました。

「戦没画学生、一人一人のご遺族の思いは決して忘れられるものではないんです。彼らの作品は、生きています。ですから、モノとして呼吸し続けていける環境をつくらないといけないんです。」

「だから、私も高齢になってきたので、新しい館長を選ばしてもらって二人館長でやりたいと思っています。また、立命館大学（立命館大学平和祈念ミュージアム）にもバトンを渡したんです。」



◇未来への展望

自分の最後の仕事として、福島に被爆地の浪江町（3.11）と沖縄県那覇市おもろまち（6.23）に、年一回公開の美術館ができないか考えています。普段は、若い絵描きを集めて、アトリエとして使ってもらえたらいいと。しかし、なかなか難しいんです。

◇若者たちへの伝言～窪島誠一郎館長からのメッセージ

やりたいことがあったら挑戦してください。「金がないから」と諦めるのではない。金がないという人は、金持ちでもできない仕

事ができるんだと思った方がいい。

大事なことは、一生懸命必死に努力し続ける真剣さが大切なんです。なぜならば、努力の仕方や人とのめぐり合い、その時のタイミングとか運不運が関係するからなんです。

夢がかなうことは、夢を失うことと同時にですね。夢がかなわないことは、むしろ幸せなことではないかと思うんです。



私たちからの返信

窪島さんのお話の中で特に印象に残った言葉があります。それは、「無言館は存在してはいけない美術館である」というものです。無言館は戦争があったからこそ生まれた美術館であり、私たちへの戒めのような役割を果たしているのだと思いました。

戦争により夢を奪われ、命を散らした画学生たちは、今のわたしたちをどう見つめているのでしょうか。ぜひ一度、皆さんも無言館を訪れ、彼らの魂の叫びに耳を傾けてみてください。

（栗林 果穂）

「無言館は本来あってはならない美術館」「作品がのこっている限り彼らはこの世から死んでいない。」という窪島さんの言葉が印象に残りました。無言館はただ「戦没画学生を追悼する美術館」として存在しているだけでなく、絵を描くことが大好きだった画学生たちの、「もっと生きて絵を描きたかった」という声を受け止めながら、彼らの命を守っていく場所でもあると私は捉えました。画学生たちは戦没してしまいましたが、彼らの作品の命を今後も守っていく必要があると感じます。

（上野 未来）

第3部

活動を振り返って



自分にできることを続けて

社会福祉学部 4 年 栗林 果穂

私は昨年度、上田市と太平洋戦争について研究していた山浦ゼミに所属していました。元々、戦争に対して特別に強い興味・関心はありませんでしたが、ゼミでの学びを通して、自分自身に変化が表れました。

上田市に残る戦争遺跡を実際に訪れたことで、身近な所にも戦争の痕跡があることに驚きつつ、生まれ育った地にある戦争遺跡の存在を知らなかったことに、危機感を覚えました。これまで、誰からもそういった話を聞かされたことがなく、同世代の人も似たような状況かもしれないと考えました。

また、戦争体験を持つ方へのヒアリング調査を進める中で、私たちが人生の先輩方が過ごした壮絶な青春時代について、直接語り継いでもらえる最後の世代だということを改めて意識しました。だからこそ、自分たちは知るだけで終わらせず、次の世代に伝えていきたいという気持ちが芽生えたのです。そうした経緯で、昨年は地域の小・中学校、高校へ赴き、学んだことを語り継ぐ活動も実施しました。

今年度からは、大学の都合でゼミが閉講になりましたが、未来を担う若者が戦争について知ろうとしなければ、戦争の記憶は途絶えてしまいます。悲惨な過去から目をそむけ、歴史を風化させてしまえば、再び同じ過ちを繰り返すことに繋がってしまう。そのような思いから、平和教育を意味する Peace Edu というサークルをたちあげ、人々の心に平和の灯りをともす活動を続けています。

この1年間は、活動の中心テーマとして学童集団疎開を取り上げ、別所温泉への疎開がどのようなものであったか、明らかにするために調査を行ってきました。その過程で、立教女学院の集団疎開についてより詳しく調べたいと思い、実際に東京都杉並区にある立教女学院の資料室へ伺って、疎開に関する貴重な資料を貸していただくことが叶いました。これにより、更に研究が深まったと感じています。

また、本年度も学んだことを語り継ぐ活動を継続しており、まちなかキャンパスや松本市にある中学校に呼んでいただき、授業をしています。子どもから大人まで、様々な年代の人と一緒に、平和について考える時間を持つことができました。

私たちが、普段何気なく過ごしている日々の中には、戦争の歴史を後世へ伝えたいと願っている、「モノ」・「ヒト」が存在します。身の回りにある戦争の記憶と痕跡を受け継ぎ、この先へ繋げていくことは、未来を生きる私たち若者の責任です。もう二度と、理不尽に笑顔と自由が奪われないよう、平穏な幸せを享受できる社会の実現に向けて、この先も努力していきたいです。

戦後80年がたつ今だからこそ

社会福祉学部3年 赤池 来菜

私は、今年度からこの継承活動に取り組み始めました。活動を始める前までは、戦争について漠然としたイメージしか持つことができず、戦争はいけないことであるという認識しかありませんでした。しかし、活動を通して、戦争当時のリアルを知ることができ、戦争は誰もが戦っていたこと、戦争には様々な被害があったことを学びました。戦争と言えば、特攻隊や、武器など、直接的な戦いを思い浮かべる人が多いと思います。しかし、戦争では、子どもたちも親元から離れ、淋しさや飢えと戦い、大人たちもわが子との今生の別れかもしれない状況でも、勝つ為にという思いで別れを受け入れたのです。

私たち若い世代は、教科書の中で学ぶ戦争しか知りません。少なくとも私は、戦争は自分とは無縁のものであり、現実味のない話のように思っていました。正直、社会科の授業で戦争について習っても、テストのために学ぶという認識さえ持っていました。

現在、戦後から80年が経ちました。戦争を体験された方のお話を聴くことが難しくなり、私たちとは遠いものとなってしまいます。そんな中で、教科書で学ぶ戦争ではなく、人から学ぶ戦争を語り続けていくことは大切であることを私はこの1年間でたくさん実感してきました。

私たちに語ってくださった方々は、「自分たちと同じ経験をさせたくない」「戦争が起きない平和な世を願う」という思いから、私たち若者に「伝えたい」「語り継ぎたい」という熱い思いが伝わってきました。

現在も世界では戦争が続いています。また、いつ戦争が始まるかわかりません。日本が絶対に戦争に巻き込まれないという確証はありません。もし、戦争当時の様子が語り継がれなくなっていくと、同じ過ちが繰り返されてしまうかもしれません。私は、日本が平和で、戦争をしていないのは、当時の様子が語り継がれ、戦争による被害を鮮明に覚えているからだと思います。だからこそ、終戦から時がたった今も、戦争を語り継ぐことが必要不可欠であると考えています。そしてこの語り継ぐことは、次世代を担う若者たちの役目であると考えようになりました。

私は将来小学校の教員を目指しています。そこで、教科書で学ぶ戦争の知識だけでなく、戦争当時の様子、状況などを当時の人の声から子ども達に学んでもらいたいと思います。

80年も前となれば、みなさんにとってははるか昔のお話かもしれません。しかし、皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんなどが経験され、無事に生きて下さったからこそ、今の皆さんがあるのです。もしかしたら、皆さんの周りにはまだ当時の方の声が聴けるかもしれません。本当の平和な世界を築くためにも、戦争や平和、命について、学び、考え、皆さんが伝えていくことが必要になってくるのではないかと思います。

語り継ぐ活動を振り返って

社会福祉学部 3 年 小川 真央

私は、今年度から活動に参加しました。初めは戦争遺跡をめぐり、その後にインタビューや語り継ぐ活動を行いました。これらの活動を通して、感じたことや考えたことを書いていきます。

まず、上田飛行場跡や仁古田の半地下工場跡、油を採った傷跡が残る松の木などの戦争遺跡をめぐりました。戦後 79 年である現在まで残っている物が、思っていたよりも身近に多くあり驚きました。同時に、79 年経った今でも残っているものを大切に取り守り続けていくことが、今生きている私たちがすべきことであると確信しました。

また、別所での戦時下における体験やお話をお聞きしました。これまで受けた歴史の授業のように大きな出来事をただ学ぶだけでは分からない、その時の詳細な様子や感情を知ることができました。やはり、本を読んだり、作られた物語を聞いたりするのではなく、実体験のお話を聞くと、より心に残り、他の誰かにも話したくなるのだと感じました。

さらに、自分が見た遺跡やうかがったお話を、中学校で語り継ぐ活動を行いました。中学生に戦争の話をするのは難しいと感じていましたが、自分の言葉で自分が感じたことを伝えるということを大切にして、お話をしました。私たちの問いかけに対して、中学生のみなさんが真剣に考えてくださった姿が印象に残っています。戦争の話を聞いて感じたことや考えたことを誰かと共有したり、話し合ったりすることも、戦争の時代を生きていた人や物に思いをめぐらせることができる大切なことだと感じました。

これまでの私の中では、戦争は遠い昔の遠い場所の話というイメージがありました。しかし、戦争遺跡を見たり、実際に戦争を体験された方々のお話を聞いたりしていくうちに、今でも傷や感覚が残っているものなのだと分かりました。戦争があったことを身近に感じるためには、やはり自分の目で見たり、自分の耳で聞いたりする必要があると感じました。また、自分が知ろうとさえすれば、いつもは見えていなかったとしても見ることはできるのではないかと考えました。現在も残っている戦争遺跡を見たり、戦争を体験された方のお話を聞いたりできる機会を、自分から追い求めていく姿勢を大切にしなければいけないと再認識しました。

これらの活動を通して、見たことやうかがったことを忘れずに記憶に残していくことが、当時の厳しい生活を強いられていた人々に対する心からの敬意の示し方なのではないかと思います。これからも戦時下の上田を継続的に調査し、多くの人に伝えていきたいです。

さらに、身近な戦争遺跡を知ったことで、自分が今住んでいる場所にも戦争の痕跡があるかもしれないという視点をもつことができました。この先、自分が新しく住む場所でも、この活動で培った視点を生かし、戦争を忘れないための行動を実践していきたいと考えています。

今の私にできることは

社会福祉学部3年 油井 凱心

私は今年度からこの活動に参加させていただきました。今までの私は、戦争に対する知識は教科書に書いてあること程度の知識でした。そんな中、この活動を通して様々なことを学び、戦争に対する考え方に変化がありました。

5月にフィールドワークで上田市内にある戦争遺跡を回りました。打合せ段階では、戦争遺跡を見てレポートに書く、そんな思いでした。しかし、矢羽根型に削られた松の木や、仁古田地区にある旧上田飛行場の半地下工場跡を見た際に上田市にもこのような戦争の跡があることを知りました。そして、その現状や作られた背景などをお聞きする中で、今の自分のままでは、戦争について何もわかっていないことを思い知らされました。また、戦争を二度と起こしてはいけないという意味もはっきりととらえられていないことに気づかされたのでした。今回のフィールドワークで一番印象に残っているのは、上田東高校にある、戦災記念の櫓です。ここは、私の母校なのですが、今回の活動で初めて母校に戦争遺跡があることを知りました。馴染みあるところが戦争で空襲を受けていたことを知らなかった、そんな自分が恥ずかしく感じました。

9月には、首都東京への空襲から避難するために別所地区に集団疎開していた東京都杉並区にある立教女学院の資料室に資料の閲覧をさせていただくことができました。直接現地に行って資料を収集することを通して、改めて視野を広くすることの大切さや本物を知ることの大切さを学びました。

最後になりますが、私が皆さんにお伝えしたいことは、視野を広くすることの大切さと本物を知ることの大切さのように思います。普段、何気なく通っている道ですが、もしかしたら戦争遺跡があるかもしれません。本物を知ること、物の見え方が変わってくるかもしれません。これは戦争に限った話ではありませんが、皆さんにはこの冊子を通して少しでも戦争のこと、先人たちの思い、そして視野を広くすることの大切さや本物を知ることの大切さについて考えてほしいと思います。

この一年で、戦争について理解しきれたわけではありません。今後も自分なりに戦争について知り、それを発信していきたいと思います。

《 編 集 後 記 》

1945年に太平洋戦争が終戦を迎え、私たちの国は大きく変わりました。軍国主義により、国民の尊い命が失われたことを深く反省し、決して同じ惨禍を繰り返さないために日本国憲法において恒久平和の実現が掲げられました。

あれから月日は流れ、来年は戦後80年となる節目の年です。終戦時にこの世に誕生された方が80歳となり、実際に戦地に行かれた方々や戦争を色濃く記憶されている方々は、更に高齢となっています。戦争を本当の意味で知っている方と直接お会いし、お話をお聴きすることが困難になっていく中で、どうやって人々の心の中に戦争の歴史を残していくかということは、喫緊の課題であり、非常に重要なテーマではないでしょうか。

世界では、現在も様々な争いが起きており、ロシアによるウクライナ侵攻や、イスラエルとパレスチナの問題などがメディアで取り上げられています。しかし、これらの事実を、報道を通して知ることはできても、自分事として捉えることは難しいと感じます。特に、戦地への出征体験者との交流の機会が希薄になる若い世代ほど、その傾向は顕著かもしれません。私たち若者にとって、日本が戦争をしていた時代があったことは、教科書の中にある歴史の1つとしては知っていても、自分とは関係の無いこととして切り離しがちです。しかし、「考えない」、「忘れる」ということは、再び同じ過ちを繰り返すことに繋がります。戦争を、はるか昔の遠い出来事のように感じやすい私たちこそ、より一層過去の事実から目をそらさず、今の世界を見つめる姿勢が重要だと思います。

未来を生きる全ての人々に、平和な日常が訪れ続けることを願い、「若者たちへの伝言2024」を作成しました。どうぞ、多くの方にお手に取っていただけたら幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にお力添えいただきました、方々には多大なるご支援をいただきました。ここにスタッフ一同、心より御礼と感謝を申し上げます。

2024年12月

長野大学 Peace Edu（学生サークル）

○栗林 果穂	社会福祉学部	4年
赤池 来菜	同	3年
小川 真央	同	3年
油井 凱心	同	3年

監修 長野大学副学長 山浦和彦（学生サークル顧問）

記録集作成 | 長野大学地域づくり総合センター「信州上田学」2024 年度事業
「若者たちへの伝言」プロジェクト

監 修 | 長野大学副学長 山浦和彦（学生サークル顧問）

取 材 | 学生サークル Peace Edu.

協 力 | 別所温泉つるや旅館、残照館（無言館）、立教女学院資料室 ほか
聴き取り調査にご協力いただいた皆様

発 行 | 2025 年 1 月



長野大学 HP 信州上田学サイト



みんなでつくる信州上田デジタルマップ
(信州上田学の情報発信のツール)